キリスト教神秘主義者の信仰における病いと救いについて 第二部

小泉友美 Tomomi KOIZUMI

目次

霊的暴力試練における悪魔の憑依 Jeanne des Anges ジャンヌ デアンジュ (1602-1655) 1

霊的暴力試練における悪魔の憑依 Jeanne des Anges ジャンヌデアンジュ (1602-1655)

ジャンヌは西フランスのルダン (Loudun) のウルスラ修道会 (Ursulines) の修道女で、幼少期の事故で身体障害者となりました。1627 年に、西フランスのルダンのウルスラ修道会の修道院長となりましたが、悪魔憑きの体験を通して心身苦しみ、1632 年の「悪魔憑きの裁判」の中心人物として知られましたが、カミへの救いを求め続けました。「Autobiographie 自伝」(1644 年刊行小泉友美翻訳) の著作は、残酷な苦しみが生々しく描かれております。その著作を土台として、本文を忠実に、その苦しみと救いをアレンジしてみました。

1623 年 愛による情熱と悪魔

これより無為に過ごしてきた私の生涯は、いかに無価値であり、カミの前で赤面するものです。私のなかにある悪意、偽善、二枚舌、傲慢さ、自意識のつよさ、不品行さはいかにカミへの愛を侮蔑して貶めたか。
過去 3 年間にわたって、あまりにも自由奔放な生き方をして、カミの存在をないがしろにしてきました。祈りにも力が入ることができずに、読書に専念しようとしても、文字が意味もわからずに流れてゆくのみで、幾度も幾度も同じページ、同じ行を読み返してしまう。私は自分の中に動めいている罪悪感から逃げることができずに、混乱と盲目の中で、いつもの悪い繰り返される習慣によって、悪魔に誘惑されるままになってしまいました。
アスモデ (Asmodée) という哀れなる悪霊は、私の前に恐ろしい容貌を持って出現しました。その恐ろしさ、残酷さはあまりに暴力的なものであり、苦しめさせました。
レビアタン (Léviathan) は私の脳内にある時、暴力的な態度を持たずに、従順で良く私に従いました。物質的、金銭への欲望が昂ぶってゆきました。
ベエモ (Béhémot) は 2 年間にわたって、私のこころを無感覚にしてゆきました。この絶望感によって、地獄へと堕とされた気になって、まったくカミの救済は何も感じられませんでした。私の精神は冒涜の言葉で溢れかえりました。
イサカロン (Isacaaron) は極めて不純で汚れた霊であり、さらに上まわる凶暴な霊であり、私の心身は疲れはててしまいました。
「このあまりにも強烈な暴力性によって、自由を失わされました。」

悪魔達は、私に襲いかかって来て、服をずたずたに引き裂いて、両足で地面を激しく叩いて、両掌で激しく顔を打って、身体中が青痣だらけになりました。一晩中、悪魔達は私に襲いかかって来て、苛み、さらなる絶望へと堕ちいらせました。竜、犬、獅子、山羊や動物達に変化して、脅し、罪を犯すようにそそのかしました。この呪われた霊は私を殺すと脅迫して、激しく私を打ちました。この殴打があまりにも激し過ぎたために、顔はいびつに変形して、全身が打ち傷だらけになりました。
この霊は私を罵りましたが、カミは常に勇気を与えて励ましをくださり、この霊的試練がカミの御前に善きものでありますようにと願う少しばかりの虚栄心が哀しく思えましたが、さらなるカミへの愛の情熱の炎が魂に灯り、こわばって冷たい心身を温めてくださったのでした。おそらくこの霊的試練とは、私から自由に話す意思を剥奪して、思い浮かんでくる考えをも分かち合うことも出来なくさせましたが、この絶望の霊的試練において、私は完全に盲目であり、カミへの愛の恩寵において、生きる意欲を止めて死んでゆきました。

1635 年 1 月 自死を決意

死の危険にさらされる機会があまりにも多くなりました。このように死んだ方が良いと願うのは、過酷な環境にあり続けて、果てしなき苦しみが続くよりも普通のこころでしょうか?
告解を受けた翌日、絶望の念にかられるままに廊下奥の小部屋へと駆け込み死を決意しました。告解士よりいただく銀製の鋭利なペーパーナイフで、薄い紙片を切り裂く感覚で、横腹を突き刺しました。痛みは感じず、傷口も浅かったので、ふらふらとおぼつかない足どりのままに、再び聖堂へと戻ってあこや貝の聖水を全身に振りかけて清めました。目を上げると、大天使の翼が抱えこんでいる十字架に、薔薇色の七色に彩どられた円が映って厳かな気持ちとなって、そのままひざまずいて痛悔の祈りを捧げました。外界から照りつく光はあまりにも眩しくて、両眼を開いてはいられないほどで、裏からの照り返しに、太陽の黒点に呑み込まれてゆくように真っ黒で盲目となってしまいました。こんな誘惑は、どうしても私の人生を滅ぼしてしまい、ますます不幸な運命を嘆かせます。祭壇下の花器に立てかけてある花鋏を手にとって、着ているブラウスを大きくぎざぎざに切り裂いてしまい、脇腹をかすめて、あまりの痛さに地面に倒れるままに、転がりまわって、その暴力性は口では説明できませんでした。魂に語りかけてくる声が響いてきて、
「あなたはなにをするつもりなのですか? あなたのすべての悪い方向を避けるままに、ただひたすらに、キリストにすがりなさい。そして、キリストの元に改心なさい。
その胸に抱きしめられて、受けとめられるままに。」
この十字架に目を止めると、キリストの片腕は十字架より崩れ落ちてゆき、もう片方の腕を私の方へと向けてくださった。後を振り向くことなく、この完全なる深い闇の状態から出ていきたい。思いっきり、こころの奥底で慈愛にすがりついて泣き、罪の許しを乞いても、胸いっぱいとなってしまいました。訳もわからず泣きじゃくるままに聞こえ

てくるのは、「もしもカミの元に改心するのであれば、貴女は救われるであろう。ひたすらに善き魂を持つように努めて、霊戦に挑めよ。」
救済を求めてゆく先に、この戦いの精神を得ました。

1637 年に 26 ヶ月にわたって続いた霊的試練による病

次の恐ろしい、身震いするような戦いは、いつ、どのように訪れるのでしょうか?
何一つ音のしない私の寝室には、優しい黄色の月光が隙風に揺れるレースのカーテンに、くっきりと落とされ、随分と痛みつけられてしまったこの肉体は、骨がくっきりと浮かびあがって、息をするのにも一苦労。
幼少期のふとした落下事故より、背中が歪に曲がって右肩には小さな瘤が自然な右腕の動きを阻止してしまう。長年に続く、苦しみの試練によって筋肉を一層強張らせて、もうこの寝台から起き上がることは出来ない。穏やかな微睡みの内に少しずつ入ってゆくには、いまひとつ納得出来ません。
その燃えあがるような高熱は、次の呼吸を与える間もなく、体内の血液を湧きあがらせて、閃光のような激痛が走りぬいてゆきました。思わず手にした銀鈴が震え、伝わって、小走りに駆けつけた霊的姉妹の傍らには久しぶりの医師がいました。大事にはいたらないと、あまりの痛さに両掌で押さえる胸を一瞥して、見事に左腕の瀉血をおこないました。3 回にわたって切られた腕より、勢いよく渦を巻いて滴ってゆく、出血が止まりません。偽りの胸腹炎と判断した医師の言葉が恨めしく思えます。偽りがいつ誠になるのか、さらに 7 回にわたって瀉血されるまま、すでに起き上がる力なきままに、ますます身体が弱まってゆきます。
絶望という試練を受けて、カミの存在をも否定するように。
「カミのみぞ知る。もしもこのまま地獄に堕とされてゆくのなら、任せるままに。すでに呪いはなし。」
すべてから諦めた心境となって、怒りに燃えて医師に伝えました。
「私は死刑の宣告を受けて、すべてから見放されてしまいました。何故に私の内に極端なものが押し寄せて来て、いかに死にたいと願っても、もうなにもする術はありません。」
疲れた無表情な顔の医師曰く
「貴女の病は不死の病であって、何もする術はなし。お好きなものを口になさい。しかし、薬はもはや何も役に立ちません。」
少しずつ身体に極度な痛みが増してゆく。私はこの病によってももうすでに死ぬことは出来ないであろう。内面に響く神の声とは、ますます酷い状態になってゆき、ますます死にゆく危機に陥ました。」

1657 年　告解士との永遠の別れ

常日頃よりこころを通わせることなく、精神的な指導士にもならないこの告解士の死を告げられた時、意外な程、虚ろな気持ちになってしまいました。最初は乾ききって、何も感じられませんでしたが、修練期において次々と亡くなってしまった 2 人の兄と 4 人の妹のことを思い出したのでした。
「私は私であって、私意外ではなにもない。」
虚ろな気持ちから、痙攣の發作や幻覚によって心身が蝕まれてゆくようになって、魂が暗くなってゆくなか、自分とは何か、問い正していることが不思議に思えました。この崩壊していく中で感じとった言葉とは、
「死を通して、私の告解士はキリストの愛に抱かれて、閃光のように煉獄に降りていったのでしょう。」
この日をもって、度重なるヒステリーの症状に苦しみ、苛まれるようになりました。

1661 年　最後の手紙

(ジャンヌはこの年を持って正気を完全に失って、右側の身体が麻痺して筆を持つ事が出来なくなってしまいました。地面に転がり、自殺の意思が日々襲って、ついに寝たきりとなって亡くなるまで、もう他の慰める方法はありませんでした。)

真夜中に私はとてつもない悪寒を覚えました。丸く広い橙色の暖かな光がベッドに満ち溢れてゆきましたが、底知れない暴力によって、小刻みに揺れ動かされていました。また、すべての感情が失われてゆき、すべての外部からの感覚が失くなってゆき、しかし、私のこころはますます解放されてゆくようでした。
見知らぬ人の気配がベッドに近づいて来て、私の左の掌の甲を毛布から取りだして接吻しました。まるで私は、その見知らぬ人の手が、私の心臓に柔らかく置かれて、その手の相手に憐憫は無いのかと尋ねました。
私はしばらくの間、無言でありました。そっと視線を注ぐと、長い髪を腰まで垂らした美しい子どもが枕元に立っていました。力が全身から漲って来て、するりとベッドから両足を出して立つ事が出来ました。開かれた窓際に立つと、その美しい子どもは私にこう語りかけました。
「貴女にもう苦しんでもらいたくはないのです。ただひたすらに、現状を受け入れてもらいたいだけなのです。カミの力はあまりにも強く、どんな誓いにもかなうまい。」
私は今までの苦しみの時間によって、カミからせっかく与えられた貴重な時間を奪われたような気がして哀しく思い、すべての心身に課される苦行や償いは軽過ぎる気がして、もっとさらなる激しい苦行を求めましたが、それはまるで私自身がキリストの死という罪を背負された罪人のように思いましたが、何故もっと苦しみたいのかわからず、ひれ伏してこう祈りました。
「カミよ、私はあなたの見失われた羊です。私の祈りをあなたの胸元に受け取りたまえ。」

冷や汗が滝のように足元まで流れ落ちてゆきましが、痛みが少しずつ和らいで来たように思えて感謝の祈りを捧げました。
「主よ、あなたは私の病を癒やしてくださいました。これより、医者よりどのような薬も越えられないようなあなたの力で私を癒やしてください。」
振り向くと、私のベッドの上には、先程の美しい子どもから贈られたらしいローリエの枝と一束のローズマリーの香しい薫がただよってくるのを識りました。美しい子どもは「この草を握りしめなさい」と命じました。気が付くと、2 人の修道女が純白の蝋燭を灯し、医者達が私を囲み見下ろしていました。激しい胸騒ぎをしたものの、もう力無く先程贈られたローリエ 1 束の葉がはらはらと落ちてゆき、私は私ではなくなりました。見ず知らずの神父が書きかけの机の上にある私の自伝の紙片を書き集めて、蝋燭の火で読んでいます。私は祈りました。
「カミの恩恵でこの書き物が 1 冊の本となりますように。私の苦しみが救いとなりますように。」
「Dieu n’en sera point offensé mais plutôt loué カミは侮辱されることなく、讃えられべき御方」
そして、私の記憶はカミとともに記憶が少しずつ失われてゆき、黒衣の神父は私の書いた紙片を書き集めて、蝋燭を吹き消して部屋を静かに出てゆきました。

完

キリスト教神秘主義者の信仰における病いと救いについて 第二部

著　者　　小泉友美 Koizumi Tomomi

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社